

【論文】

小泉八雲とちりめん本——『若返りの泉』の成立過程を中心に——

石井 花

はじめに

小泉八雲の再話文学の中には特殊な形態で出版されたものがある。それは、ちりめん本である。八雲のちりめん本は長谷川弘文社から5冊刊行されており、よく知られたものとしては楊枝の妖精が登場する『ちんちん小袴』(Chin Chin Kobakama)が挙げられ、八雲の再話文学を研究するにあたってこれらちりめん本は無視できない重要な作品であるといえる。しかし、それらの成立過程や典拠について詳しく論じた先行研究はまだ少なく、不思議と手薄になっており、これまで十分に論じられてきたとは言えない。特に、八雲のちりめん本の中でも『若返りの泉』(The Fountain of Youth)の成立過程には謎が多い。具体的には、『猫を描いた少年』(The Boy Who Drew Cats)から『ちんちん小袴』までの4冊は1898年から1903年の間に数年おきに出版されているが、『若返りの泉』だけ1922年に出版されていることや、『若返りの泉』は『東の国から1』(Out of the East)に収録されている「夏の日の夢」(The Dream of a Summer Day)の第5節で語られる物語と内容が重複するということが挙げられる。

本稿では、第1章でまず八雲がちりめん本に惹きつけられ、実際に長谷川弘文社から自身のちりめん本を刊行するまでの経緯について書簡を引用しながら整理し、第2章で『若返りの泉』が成立した過程を明らかにしていく。

第1章 八雲とちりめん本

1-1 ちりめん本に対する八雲の情熱

ちりめん本とは、「木版多色刷りで挿絵を印刷し、さらに文字を印刷した和紙を圧縮してちりめん状に加工した絵入り和装本²⁾」である。その質感は「絹製の縮緬を連想させるようにやわらか³⁾」で、美しい装丁や挿絵が施されており芸術性も高い。明治中期から後期にかけてちりめん本は成立し、その頃に最も多く刊行された。様々な出版社から刊行されたが、その中でも長谷川武次郎が出版したちりめん本「日本お伽話シリーズ」(Japanese Fairy Tale Series)は、明治36年に発行された巖谷小波の和英対訳「日本昔噺」のシリーズ構成に大きな影響を与えたとされ、日本の児童文学史においても重要視されている。具体的に、長谷川の「日本お伽話シリーズ」を構成した物語は次の26話である⁴⁾。

1. Momotaro; or, Little peachling
2. The Tongue Cut Sparrow
3. Battle of the Monkey and the Crab

4. The Old Man Who Made the Dead Trees Blossom
5. Kachi-Kachi Mountain
6. The Mouse's Wedding
7. The Old Man & the Devils
8. Urashima
9. The Serpent with Eight Heads
10. The Matsuyama Mirror
11. The Hare of Inaba
12. The Cub's Triumph
13. The Silly Jelly-Fish
14. The Princes Fire-Flash and Fire-Fade
15. My Lord Bag-o'-Rice
16. The Wooden Bowl
- 16'. The Wonderful Tea-Kettle
17. Schippeitaro
18. The Ogre's Arm
19. The Ogres of Oyeyama
20. The Enchanted Waterfall
21. Three Reflections
22. The Flowers of Remembrance and Forgetfulness
23. The Boy Who Drew Cats
24. The Old Woman Who Lost Her Dumpling
25. Chin Chin Kobakama

当シリーズの第 23 作目から 25 作目にあたる、『猫を描いた少年』(The Boy Who Drew Cats, 1898) と『団子をなくしたおばあさん』(The Old Woman Who Lost Her Dumpling, 1902) と『ちんちん小袴』(Chin Chin Kobakama, 1903) は小泉八雲が担当している。八雲のちりめん本は、前述の 3 作に「日本お伽話：第 2 シリーズ」(Japanese Fairy Tales: Second Series) の第 1 作目『化け蜘蛛』(The Goblin Spider, 1899) と、八雲の没後から 18 年後に刊行された『若返りの泉』(The Fountain of Youth, 1922) を含めた計 5 冊である。

最初に八雲がちりめん本の出版に興味を持ったのは「日本お伽話シリーズ」第 10 作目の『松山鏡』(The Matsuyama Mirror, 1886) を読んだことがきっかけである。八雲は、チェンバレンに宛てた 1894 年 3 月 9 日付書簡⁵⁾に次のように記している。

I'm trying to write an essay —no, a fantastico-philosophical sketch —about Mirrors and Souls. Especially Souls. Which causes me to think about Mrs. James version of the “Matsuyama Kagami.”

Who is Mrs. James? I have read her version about fifteen times, and every time I read it, it affects me more. And I can't help thinking that the woman who could thus make the vague Japanese incident so beautiful must have a tender and beautiful soul, —whoever she is, —whether missionary or not. Of course a great deal of the charm is helped by the work of the Japanese artist, —I suppose the same supernatural being who drew the pictures for Urashima.

拙訳は次の通り。

私はあるエッセイを書こうと思っています。それは鏡と魂、特に魂についての哲学的な短篇です。そしてそれはジェームス夫人版の『松山鏡』について考えさせます。

ジェームス夫人はどのような方なのでしょう？私は彼女訳の『松山鏡』を 15 回くらい読みました。そしてそれを読むたびに感動させられます。漠然とした日本の挿話をとても美しく著すことができる女性は優しく美しい魂を持っているに違いありません。彼女がどんな人であろうとも、宣教師であろうとなかろうと。もちろん魅力の大部分は日本のアーティストの絵によって助けられています。そのアーティストは『浦島』の絵を描いた同じ神業の絵師ではないかと思っています。

このようにジェームス夫人訳の『松山鏡』を「15 回くらい」読み、感銘を受け、ジェームス夫人を「優しく美しい魂」の持ち主に違いないと褒め称えている。その一方で、『松山鏡』の挿絵についても「神業」であると大きく賞賛している。

この書簡からおおよそ 2 か月半後の 1894 年 5 月 25 日のチェンバレン宛書簡⁶では次のように述べている。

What do you think about the idea of getting up a new “Japanese Fairy Tale Series”? I have quite a number of tales splendidly adapted to weird illustrations. Is there money in such a thing?

拙訳は次の通り。

新しい「日本お伽話シリーズ」を作るというアイデアについてどう思いますか？私は不思議な挿絵とみごとに合うかなりの数の物語を知っています。このようなことはお金になるでしょうか？

この頃から八雲は新しい「日本お伽話シリーズ」を作りたいという思いをはっきりと抱き始めたということがわかる。

そして、この書簡からわずか10日後の1894年6月4日付のチェンバレン宛書簡⁷では次のように述べている。

I am disappointed to hear you made nothing by those delicious Fairy-Tales. I thought there was a fortune in them. Sets must have been sold by thousands. A small set I could certainly make; but I want you to read my book first. And my head is full of dreams. I dream of—

(1) “The Story of a Soul,” —to be illustrated with weird, but not ugly, pictures of the Meido,—River of the Three Roads, River of Tears, Sami Kawara, etc.

(2)“(New) Japanese Fairy-Tales”—The Fountain of Youth —The Haunted Temple —The Artist of Cats —The Waiting Stone —The Test of Courage —The Story of an Ihai —The Ise o-fuda —The Old Woman and the Oni —Jizo and the wicked Hotel-keeper, etc., etc., etc.

(3) “Western Science and Eastern faith.” A comparison of results in the form of an address. Shall I, or shall I not try?

拙訳は次の通り。

お伽話シリーズから何のうまみも得ることがなかったということをあなたから聞いて私はがっかりしています。それらには富があると思っていました。セットは必ず数千部売れるでしょう。私が小さなセットを作ったら、一番に私の本をあなたに読んでほしいです。私の頭は夢でいっぱいです。私が夢見ているのは…

(1)「魂の物語」—奇怪だが醜くはない、三途の川、涙の川、賽の河原等といった冥土の挿絵をいれる。

(2)「(新) 日本お伽話」—若返りの泉、幽霊寺、猫の絵師、待ち石、勇気の試練、位牌の話、伊勢のお札、お婆さんと鬼、地蔵と悪い宿主等

(3)「西洋の科学と東洋の信仰」演説の形での結果の比較。やってみますか、それともや

めておきますか？

1894年5月25日のチェンバレン宛書簡で「新しい「日本お伽話シリーズ」を作るというアイデアについてどう思いますか？私は不思議な挿絵とみごとに合うかなりの数の物語を知っています」と言っていたのは、具体的には上記のリストの(2)に書かれたものを指していたのだろう。5月25日の書簡で「このようなことはお金になるのでしょうか？」と尋ねていたが、チェンバレンからあまり良い返事を聞けなかったということが6月4日付書簡の冒頭部分から察することができる。しかし、八雲のちりめん本を作りたいという情熱は全く冷めておらず、出版への展望がますます具体的で明確なものになっているように思われる。

このような八雲の情熱に押されたのかチェンバレンは長谷川を訪ね、その時の様子を書簡で八雲に伝えている。次にその1894年6月20日付八雲宛書簡⁸を引用する。

What I wanted to say is that I have seen Hasegawa, the publisher of the Fairy-Tale Series, and learnt from him that he has latterly been paying \$20 per tale. He was anxious for an introduction to “my friend in the country who could write several good ones.” But I did not give him your name and address for the nonce, thinking it best not to do so before again consulting you. One thing to be remembered is that he is not omnivorous. Only a single tale at a time is his view of things, each taking long to illustrate, and various other circumstances, as I know from experience, causing delay. The illustrations have generally been evolved gradually between him, the artist, and the writer. Now am I to tell him anything more before I go off to Miyanoshita, which may be any time in July?

拙訳は次の通り。

私が言いたいのはお伽話シリーズの出版者である長谷川に会ってきたということです。彼から近頃は一話につき20ドル支払っているということを聞きました。彼は「いろいろな良い物語を書くことができる田舎にいる私の友人」をしきりに紹介してほしがっていました。しかし、私はさしあたって彼にあなたの名前や住所を教えませんでした。もう一度あなたに意見を聞く前にそうしない方が良く考えたからです。ひとつ覚えていてほしいことは、彼が何でも取り入れるタイプではないということです。一度にひとつの物語のみ手掛けるというのが彼のやり方で、挿絵やその他様々な事柄に長い時間をかけます。それゆえ私の経験から分かるように遅れが生じてきます。挿絵は大抵長谷川とアーティストと作家の間で徐々に

進行していきます。7月中に宮ノ下を発つ前に彼に何か言っておきますか？

この手紙にある「いろいろな良い物語を書くことができる田舎にいる私の友人」とはもちろん当時熊本に住んでいた八雲のことである。これを受けさっそく八雲は熊本から上京し、1894年7月16日に「長谷川弘文堂に行って、物語二つを渡し⁹⁾」ている。

1894年5月25日から6月20日の間に交わされた八雲とチェンバレンの書簡を詳しく検討すると、八雲は長谷川と知り合う前から明確で具体的なちりめん本出版の展望を持っていたということがわかる。また、『松山鏡』に感銘を受けたと記した手紙から、八雲が長谷川弘文社を訪れるまでの期間はおよそ4か月しかなく、思い込んだらすぐに行動に移すという八雲の行動力の高さが窺い知れる。

1-2-1 長谷川武次郎とちりめん本

第1節では八雲が長谷川と知り合うまでを整理した。次に、八雲のちりめん本の出版に深く関わった長谷川武次郎が一体どのような人物なのか、また、どういった経緯でちりめん本が作られたのかについて紹介する。

長谷川武次郎の境涯について詳しく書かれた石澤小枝子の『ちりめん本のすべて—明治の欧文挿絵本—¹⁰⁾』より要約したものを次に記す。

長谷川武次郎は1853年10月に西宮与惣兵衛の次男として日本橋に生まれ、25歳の時から子供のいなかった母方の長谷川姓を名のるようになった。西宮家は、外国商店が軒を連ねる築地に程近い京橋でワイン、タバコ、ミネラルウォーター、英語のテキストブック等の輸入業を営んでおり、武次郎はここで従来の日本になかった商取引の新しい考え方を吸収したといえる。また、銀座に設立された商法講習所にも初期の生徒として通っており、商才を身につけていった。

1869年、16歳の武次郎は築地の居留地に開かれた長老派宣教師クリストファー・カロザース夫妻のミッションスクールに通い、英語を習い始めた。武次郎の英語力の進歩は著しく、小遣い稼ぎに外国人に東京を案内したり、日本人学生に英語を教えたりするまでになった。1870年には、デイヴィッド・タムソンが教師としてミッションスクールに赴任する。デイヴィッド・タムソンは後に「日本お伽話シリーズ」の最初の六篇の英訳を担当する人物で、1880年には武次郎はタムソンから洗礼を受けている。

そのような武次郎が最初に出版したのは、木版墨摺りの『中古名家画帳 北斎遺画之部』と『訓点梵語』の2冊で、明治17年11月、長谷川弘文社と奥付にあることから、明治17年に長谷川弘文社が設立されたことがわかる。外国人宣教師等との付き合いが深くなるにつれ、自分のしたいことはこれではなく、日本にも外国語のテキストの市場はあると確信して、その出版を

目指した。

1877年、24歳の時に本所押上の印刷業者、小宮惣次郎の娘屋寿と結婚した。小宮惣次郎や屋寿は初期「ちりめん本」の奥付に印刷者として記されている。その後、武次郎の次男である与作が後を継いで西宮与作の名前で「ちりめん本」の出版を続け、武次郎は1938年7月に85歳で亡くなった。

この石澤のまとめによると、長谷川武次郎は明治17(1884)年には既に長谷川弘文社の看板を掲げ本の出版を行っており、外国人宣教師たちとの付き合いが深くなるにつれ外国語テキストの出版に可能性を見出し、それを目指したとあった。それでは、どのような経緯でちりめん本は誕生したのだろうか。ちりめん本を作った経緯について長谷川武次郎は後に『美術新報¹¹』で次のように述べている。

明治16年頃に日本の昔噺を木版刷の繪本にして英文の説明を加えて出したのが始めて、外國に知り合いがあったもんですから直に輸出をしましたのですけれども、あまり大した賣行もありませんでした。其の中に不圖縮紙でしたらばと思ひ付いてやって見ました處、これが案外評判が宜しくて盛んに歡迎されました。

長谷川自身のコメントによると、最初は普通の木版刷りの繪本に英訳を付し輸出していたが売れ行きが悪かったため、試しに縮緬紙で作ったところよく売れたとあり興味深い。当初「ちりめん本」は本の内容というよりは、見た目の美しさや物珍しさで外国人に受けていたということが推察できる。

一方で、1885年10月22日の『絵入自由新聞』に載せられた長谷川弘文社の「日本お伽話シリーズ」の広告から、当時「日本お伽話シリーズ」のちりめん本が誰に向けて売られていたのか知ることができる。

彩色繪入日本昔噺 英吉利文、獨乙文、佛蘭西文、各一冊に付金十二錢

舌切雀猿蟹合戰花咲翁桃太郎此外續 出版

学校教科用彩色無し特別廉價一冊に付金四錢

右は童蒙に□□洋語を習熟せしむる爲め各其國の大家に乞ひ簡易なる文辭を以て編述し日本風の彩色繪を加へたる美本なれば學校の賞與品又は御進物等にも亦適當の小冊なり

發賣所 京橋區南佐柄木町二番地 弘文社

この広告の中に、「童蒙に□□洋語を習熟せしむるため」「学校の賞與品または御進物等にもまた適當の小冊」とあるように、「日本お伽話シリーズ」のちりめん本が当初日本人の子供の英

語教育用テキストとして売り出されたことがわかる。興味深いのは、12 銭の彩色絵入り本の他に、その3分の1 価格の4 銭で売られている廉価版があるという点である。この廉価版は「学校教科用」で「彩色無し」であると広告には記されている。この彩色絵入り版と廉価版の違いについてアン・ヘリング¹²の説明を参照する。

明治十八年頃からはじまったと思われる、長谷川武次郎の横文字専門の出版活動は、特別に加工された縮緬紙からなる本ばかりを対象としたわけではない。例の昔噺シリーズ二十編のうち、少なくとも最初の十五編までの本は、それぞれ違った、少なくとも四つの、全く別の形式で発行されたのであろう。言いかえれば、「豪華版」、「特上」、「上」、「並」、と言って良さそうな四種類が区別できるわけである。もう少し具体的にいえば、つぎの一覧表の通りである。

イ、豪華版。両表紙も本文も色摺りで、総縮緬仕上げの本。これこそ、いわゆる「縮緬本」ということになる。寸法も縮めた分だけ小さくなるわけである。

ロ、特上版。本格的な縮緬本と同様、完全に色彩木版手摺りである。ただし、地紙は、縮緬紙に加工されずに、普通の状態である。

ハ、上版。両表紙に限り、色摺りで仕上げられているが、本文は墨摺りである。
ニ、並版。色摺りの表紙も消え、無地の柿色の表紙に、活字による質素な題簽が貼りつけてあるだけのもの。本文は墨摺り。(中略) 極めて地味な感じで、日本国内の英語、独語の教材か読本に使われたかと考えられる。

この説明によると、広告に書かれていた「彩色繪入」版とは「豪華版」か「特上版」で「彩色無し特別廉價」版は「上版」か「並版」に当てはまるのだろう。英語教育のためとは言いつつも、縮緬紙で作られた豪華なちりめん本は日本の学童向けではなく、もっぱら外国人向けの商品であったということが分かる。

1-2-2 ちりめん本出版における方向性の違い

さて、チェンバレンの仲介により八雲は長谷川と知り合うことができたが、出版の計画は思うように進行しなかったという。Frederic A.Sharf¹³は次のように述べている。

It soon became apparent that Hasegawa's motivations were vastly different from Hearn's. While he had promptly paid Hearn for two unsolicited stories and given him the impression that he was eager to receive more, Hasegawa was primarily interested in utilizing Hearn's international reputation to expand his appeal to Western audiences.

八雲が長谷川のオフィスを訪れ、「2つの物語を提供した」「長谷川はもっと物語を欲しがっているように見えた」などと1894年7月17日、22日付書簡¹⁴でチェンバレンに報告していることからわかるように、八雲は長谷川が更なる物語を切望していると受け取った。しかし、長谷川は八雲の名声を利用して欧米の読者に長谷川弘文社やその出版物をアピールすることに関心を持っていたのであって、ちりめん本用の物語を欲していたわけではなかったという。長谷川としては別の原稿を依頼しようと考えていたのだが、八雲から渡された原稿をむげに突き返すわけにもいかず、頼みもしない物語に高い対価を支払わなければならなくなってしまった、というようなすれ違いがここで起こったと推察できる。

次に引用する八雲の長谷川宛書簡には日付が記載されていないが、文中に「小さな本『みつ』をありがとう (Thanks also for the little book “Mitsu.”)」という記述がある。「the little book “Mitsu”」はおそらく1894年9月10日に長谷川弘文社から刊行された“A Day with Mitsu¹⁵”のことを指していると思われる。また、住所が熊本となっているので、八雲が神戸に移る前であると想定すると、この手紙は、1894年9月中旬から下旬に交わされた書簡であるとわかる。

—About the illustrated book you propose to publish on local manners and customs, I cannot write you very satisfactorily today. Your list of subjects seems to me splendid—I can find nothing to object to in it; and I like the arrangement proposed. This is, however, only my first impression, and as I do not wish to make any hasty judgment, I will write later on more fully.¹⁶

拙訳は次の通り。

あなたが提案された地方の風習や習慣の絵本についてですが、今はあなたが十分満足するようなものを書くことができません。あなたが制作したテーマのリストは申し分のないもののように思われます。反対するところはひとつも見当たりません。あなたが提案された並びも気に入っています。しかし、これは私の第一印象に過ぎませんし、いかなる軽率な判断もしたくありません。後でもっと十分に考えてからお手紙を差し上げたいと思います。

この書簡から、長谷川が八雲に「日本お伽話シリーズ」のため物語ではなく、「地方の風習や習慣についての絵本」のための文章を書くように提案したということが推察できる。これに対して八雲は、現時点では十分満足いくようなものが書けないと述べており、この提案を引き受けるかどうか迷っているように読み取れる。そしてこの書簡の後、同じく9月中に書かれたと思われる長谷川宛書簡¹⁷には次のような記述がある。

It would be difficult for me to do it for two reasons —firstly, lack of leisure, secondly ignorance. Much as I like Japanese manners and customs, I do not really know enough about them to write correct text for all the subjects given. Were I with you, you could help me. But that would be difficult. (中略) There is but one person I know who is perfectly, absolutely competent for such work, —a Japanese gentleman who can write English as well as I can, who has a charming style, and who is deeply learned in all these matters. If you could induce him to undertake the text, you would have something well worth reading, —something of rare value, — and perhaps something very beautiful. There is no one else in Japan who could do it as well as he —no one. (中略) The gentleman I mean is N. Amenomori, who lives at Sengenyama, Mitimachi, Yokohama.

拙訳は次の通り。

ふたつの理由から絵本のキャプションを書くのは難しそうです。一つめには暇がないこと、二つめには私がそれらについて不案内であることです。日本の風習や習慣はとても好きなのですが、与えられたテーマのすべてに正しい文章を書けるほど十分な知識がありません。あなたがついていれば助けてもらえるでしょうが、それは難しいでしょう。(中略) しかし、その仕事に完璧に絶対的に適任の知り合いがいます。その人は私と同じくらい上手く英文をしたためることができ、魅力的な文体を持ち、これらすべての風習に深い知識がある日本人の紳士です。彼を説得して文章を書かせることができれば、かなり読む価値のあるもの、最高の価値のもの、あるいはとても美しいものができるでしょう。彼以上にそのキャプションをうまく書くことができる人物は日本にはいません。(中略) その紳士は雨森信成といい、横浜に住んでいます。

八雲はこの書簡で改めて「日本の風習と習慣」の絵本について返答している。暇がないことと日本の風習や習慣に不案内であるということを理由に挿絵のキャプションを書くことを断り、その代わりとなる人物を紹介している。その人物とは雨森信成で、この書簡から八雲が彼を高く評価していることがわかる。

そして、1894年10月に八雲は神戸に移り、1894年10月14日には長谷川に、今後は神戸の『神戸クロニクル』宛に校正等を送ってほしいという内容の書簡を書いている。この時期について Sharf の前掲書には次のように書かれている。

Hearn believed that Hasegawa was vigorously pushing ahead with his two fairy tales. On 14 October 1894, he advised Hasegawa of his new address in Kobe, so that proof sheets could reach him promptly. The proofs promised for October did not arrive that month, nor did they appear in November. In the meantime, Hearn had sent Hasegawa a third story free of charge as evidence of his commitment to the project on which he thought he and Hasegawa had agreed.

Hasegawa now seemed reluctant to proceed, raising the issue of the authenticity of Hearn's text. Hearn maintained that each story had been related to him by a Japanese person, and while similarities to Western folktales could be discerned.

長谷川が、先に提供した二つの物語を進めてくれていると信じていた八雲だが、10月になっても11月になっても一向に校正が届かない。八雲はその間にも、両者が同意したと思い込んでいる「日本お伽話シリーズ」の出版計画に取り組む証として無料で三つ目の物語を送っていた、という。

その一方で、長谷川が八雲のちりめん本の出版計画を進めかねていた理由としては、それぞれの動機や仕事の進め方におけるすれ違いだけでなく、もうひとつ理由があったと Sharf は述べている。それは、八雲が提供した物語が純粋な日本の民話なのかという問題が持ち上がったことであるという。1894年10月下旬頃に交わされたと思われる長谷川宛書簡¹⁸には次のように書かれている。

I have been told that the story which I offered you free of charge, is not of Japanese origin. This I am sorry for. However "The Old Man and the Goblins" is also not of Japanese origin. Several Western stories have been adopted into Japanese folklore; and the story of the Fountain of Youth was told me by a student who had never read it in any European tongue and who located the story somewhere, I think, in the Province of Mino.

I can give you all the Japanese folk stories you want, however, if I get leisure. "The Yama-Umba and Fishseller" is one I think of writing some day. Do you know it?

(中略)

I will reply later on to your request about rewriting the first six stories of the series. Why you should wish it, however, I cannot understand. The stories succeeded well as they are Very truly Lafcadio Hearn

拙訳は次の通り。

あなたに無償で提供した物語は日本の起源ではないと言われました。これは申し訳ありません。しかし、“The Old Man and the Goblins” も日本の起源ではありません。日本の民話に取り入れられた西洋の物語もあります。若返りの泉の物語は、どのヨーロッパの言語でもその物語を読んだことがないという学生に教えられました。彼が美濃かどこかでこの話を見つけたのではないかと私は思います。

暇な時間が出来ればあなたが望むすべての日本の民話を提供できます。「山姥と魚屋」はいつか書こうと思っているもののひとつです。あなたはこの話を知っていますか？

(中略)

シリーズ最初の六つの物語の書き直しについてはまた後で返答しようと思います。しかしながら、なぜあなたが書き直しを行いたいと思っているのか分かりません。これらの物語は十分に成功をおさめていたと思います。

日本の起源ではない物語を提供したことについて長谷川に謝罪していることから、長谷川が「日本お伽話シリーズ」に入れる物語は純粋な日本の民話のみにする、という点にこだわっていることがわかる。しかし、「日本の民話に取り入れられた西洋の物語もあります」と述べているように、八雲は民話の起源や純粋性にこだわることは無粋であると考えていることが読み取れる。

またこの書簡において、「若返りの泉の物語」について八雲が言及していることは注目に値する。この点については第2章で具体的に考察する。

そして、「シリーズ最初の六つの物語の書き直し」について書かれていることから、長谷川が「日本お伽話シリーズ」の既刊6冊の書き直しを八雲に頼んでいたということが推察できる。その6冊は『桃太郎』(Momotaro; or, Little peachling)、『舌切雀』(The Tongue Cut Sparrow)、『猿蟹合戦』(Battle of the Monkey and the Crab)、『花咲爺』(The Old Man Who Made the Dead Trees Blossom)、『かちかち山』(Kachi-Kachi Mountain)、『鼠の嫁入り』(The Mouse's Wedding)である。これらは全て横浜居留地の牧師であるデイヴィッド・タムソンが英訳を担当しており、1885年に刊行されている。長谷川は、刊行から10年を迎えようとする「日本お伽話シリーズ」の代表作6つを、有名な作家である八雲に書き直してもらうことでリバイバルを図ろうと考えたのではないだろうか。しかし、この提案に対して八雲は「なぜあなたが書き直しを行いたいと思っているのか分かりません。これらの物語は十分に成功をおさめていたと思います」と述べている。

1894年10月下旬頃に交わされたこの書簡から1898年6月9日まで、書簡でのやり取りは途切れている。この間について Sharf は前掲書で

By the end of 1894, Hasegawa realized that Hearn would not be cooperative in the projects that interested Hasegawa, and correspondence between them seems to have ceased. Hearn would certainly have remained in contact with other members of Hasegawa's circle, however, especially after he moved from Kobe to Tokyo.

というように、1894年の終わりに長谷川は、自身が関心を抱いている出版計画に八雲が協力的でないことに気が付き、次第に二人の間のやり取りは途切れたように思われるが、しかし、八雲は神戸から東京に移ったのち、長谷川のグループの他のメンバーとは連絡を取り続けたのだろう、と述べている。

1-2-3 八雲のちりめん本へのこだわり

書簡でのやり取りが途切れ、八雲のちりめん本の出版計画は一時中断されたかに思われたが、実は水面下で着実に計画が進行していた。このことを窺い知ることができる1898年6月9日の長谷川宛書簡¹⁹を以下に引用する。

I have corrected the text of the little book as carefully as I could; and have made also one or two slight changes.

—I must really say that your artist is a wonderful person: the illustrations are delicious, and could not be too warmly praised.

(中略)

“Chin-chin-Kobakama” —the proof of which you read some weeks ago” —a sentence in your letter —puzzles me. Perhaps “some years ago” I may have seen it. But I really forget. I have read thousands of proofs since I saw anything from your office.

拙訳は次の通り。

出来るだけ注意深く小さな本の文章を校正しています。そして、一つか二つ細かな変更を加えています。

あなたのところのアーティストは素晴らしい人物であると言わなければなりません。挿絵は素晴らしいです。賞賛されないはずがありません。

(中略)

『ちんちん小袴』について「何週間か前にあなたが読んだ校正は」というあなたの手紙に混

乱しています。おそらく「何年前」にそれを見たかもしれませんが、忘れてしまいました。
あなたのオフィスで見た時から何千もの校正を読んできました。

書簡中に触れられている「小さな本」とは時期から考えて『猫を描いた少年』ではないかと考えられる。1894年から1898年の4年間に長谷川との書簡は交わされていないが、校正版が八雲のもとに届けられていることから、何らかの方法でやり取りを続けていたということが推察できる。また、1898年6月の時点で『ちんちん小袴』の話題が出ていることは興味深い。

実は、八雲はちりめん本について意外な思いを持っていたということを1898年9月23日の長谷川宛書簡²⁰から窺い知ることができる。

Regarding your kind offer to present me with additional copies of the story, I may say that I am quite satisfied. But there is something which I should like to have, and will be glad to pay for, —a couple of copies printed upon plain, instead of crepe, paper. Indeed I prefer the old sets of the Fairy Series on plain paper, —not only because the drawings come out better, but because the larger print is better for children's eyes. (I want to buy a plain set at some future time.) In the case of my own story, I think that much of the delicate beauty of the charming drawings is lost in the crepe edition, —especially the finely expressive lines of the old priest's face, and the character-studies of the peasant oya in the opening pictures.

拙訳は次の通り。

追加のコピーをくれたあなたの親切についてはとても満足しているといって差し支えありません。しかし、欲しいものがあります。そしてそれに対しては喜んでお金を支払うでしょう。それとはクレープペーパーの代わりに普通の紙に印刷したコピー二部です。実は私は普通の紙に印刷されたお伽話シリーズの古いセットの方が好みなのです。それは、挿絵がより美しく表れてくるという理由だけでなく、大きなプリントの方がより子供の眼に優しいからです（将来、普通の紙に刷ったものを購入したいと思っています）。その場合にしろ、私の物語にしろ、魅力的な絵の繊細な美しさの大部分はクレープ版で失われているように思います。特に、老僧の顔の細かな表情の線と、はじめの絵にある農民の親の人物描写において顕著です。

八雲は絵がきれいであるということと、子供の眼に優しいということから、ちりめん加工を

施したちりめん本よりも普通紙に印刷したバージョンを好んでいたということがわかる。

ところで、この書簡で言及されているのはどのちりめん本のことなのだろうか。書簡が 1898 年 9 月付であるという点、「老僧」が登場し、はじめのページの絵に「農民の親」が描かれているという点に注目すると、『猫を描いた少年』であるということがわかる（資料編の図 1 参照）。

1898 年に入ってから頻りに長谷川との間で書簡のやり取りが行われている。前回の書簡から 5 日後に書かれた 1898 年 9 月 28 日付の長谷川宛書簡²¹にはちりめん本に用いる字体について具体的なアドバイスを送っている。

—With regard to the types. In view of the shrinkage of the paper, I should certainly say that the heavy black-faced type is the best for the crepe edition. It would give a clear effect even after shrinkage, and so help the children's eyes. On the other hand, for plain paper printing, it is a little too heavy for the size of the page. So I should say that the light -aced type would look best for the large page; and the heavy dark type for the crepe edition, —in which its heaviness will disappear by the chirimen process.

But if you want me to decide which type would be the best to use for both forms of the book, —because it might be inconvenient to use different types, —then I should say that the black heavy type is still the best under the circumstances. It is not very pretty, but it is very clear; and the greater bulk of your sales will be crepe paper, I suppose, —for which the black-faced plain type is best adapted.

拙訳は次の通り。

字体についてですが、収縮した紙の見た目に関してはブラックフェイスタイプがちりめん版には最適だと間違いなく言えます。その字体であれば収縮した後でもはっきりした印象になりますし、子供の眼にも良いでしょう。一方で、普通紙の印刷のページの大きさにはこの字体は小さく、重すぎます。ですから、大きいページにはライトエースタイプが最適かと思います。また、ちりめん版のヘビーダークタイプは、ちりめん加工を施すことでその重さがなくなると思います。

しかし異なる字体を用いるのは不便でしょうから、二つの形態の本にどの字体を用いるのが最適か決めてほしいとお思いでしたら、やはりブラックヘビータイプが最適であるといえるでしょう。あまりきれいとは言えませんが、はっきり見えます。売り上げのほとんどはちりめん版だと思しますので、それにはブラックフェイスプレーンタイプが最適です。

ここでも八雲はやはり、見やすさと子供の眼に優しいかどうかということに気にかけている。また、「異なる字体を用いるのは不便でしょうから、二つの形態の本にどの字体を用いるのが最適か私に決めてほしいとお思いでしたら、やはりブラックヘビータイプが最適であるといえるでしょう」という記述から、ちりめん加工版と普通紙版がそれぞれ同時に刊行されていたということが窺い知れる。そして、「売り上げのほとんどはちりめん本だと思しますので」と八雲が言及していることから、八雲が好んだ普通紙版よりちりめん加工版の方が売れていたということがこの書簡からもわかる。

この書簡からおおよそ2か月半後の1898年12月11日の長谷川宛書簡²²には、八雲のちりめん本出版のタイミングに関する興味深い記述が見受けられる。

I do not believe there ever lived any old woman quite so ugly as the old woman whom the artist has drawn. If these cuts are intended to represent the good old woman, who was always laughing, I think the drawings are not satisfactory. The little Jizo is quite nice.

—I am not only busy, but suffering with my eyes; so I do not feel inclined to rewrite the six stories for you. It is true they might be improved; but this could be done by simply retouching the proofs.

拙訳は次の通り。

このアーティストが描いたおばあさんほど醜いおばあさんが実在しているとは信じられません。これらの挿絵がいつも笑っていた良いおばあさんを表現しようとしているなら、この絵では不十分であると思います。小さな地蔵の絵はとても良いです。

忙しいだけでなく目を病んでいるので、6篇の物語を書き直す気が起きません。確かに改善の余地があるかもしれませんが、単に校正を修正するだけで済むと思います。

ここで話題に上がっているちりめん本は、「いつも笑っていた良いおばあさん」「小さな地蔵」という記述から『団子をなくしたおばあさん』であると推測できる（資料編の図2を参照）。しかし、『団子をなくしたおばあさん』は1902年5月に刊行されている。1898年12月の時点で既に校正の作業に入っていることから、ちりめん本が完成してもすぐに刊行するのではなく、長谷川が敢えて時期を少しずつずらして八雲の新しいちりめん本を発表していたということも考えられる。

また、1894年10月下旬頃の書簡でも言及していた「日本お伽話シリーズ」の最初の6篇の書き直しについて、多忙と目の病を理由に改めて断りを入れている。

それから2週間後の1898年12月24日の長谷川宛書簡²³では、「日本お伽話シリーズ」の第2シリーズのタイトルについてアドバイスを送っている。

Allow me to make an observation about the series-title. In the old series, the title ran “Japanese Fairy-Tale Series”; —and the word “fairy-tale” was then used as an adjective, and was correct. But you cannot put the ordinal “second” after “fairy-tale”, and use the compound “fairy-tale” as an adjective. You might have it, “Second Japanese Fairy-Tale Series”; but that would be clumsy wording. I suggest that you had better make the title thus:—

Japanese Fairy-Tales.
Second Series.

Or you might put it thus.

Japanese Fairy-Tale Series.
Second Twenty-Five.

But I should prefer the previous way, if I were you: —“Japanese Fairy-Tales.” (for the first display-line; and “Second Series” below.)

拙訳は次の通り。

シリーズのタイトルについて私の意見を申し上げることをお許してください。古いシリーズでは、タイトルは“Japanese Fairy-Tale Series”で“fairy-tale”という言葉が形容詞として用いられておりそれは正しかったです。しかし、“fairy-tale”の後に序数の“second”を置くことはできません。そして“fairy-tale”という複合語を形容詞として用います。あなたは“Second Japanese Fairy-Tale Series”にしようと思っっているかもしれませんが、それではぎこちな言葉遣いになると思われます。私は次のようにするのが良いと提案します。

Japanese Fairy-Tales.
Second Series.

もしくは次のようにすると良いでしょう。

Japanese Fairy-Tale Series.

Second Twenty-Five.

私なら前者のほうを選ぶと思います。

八雲の『化け蜘蛛』はこの「第2シリーズ」の第1作目として1899年7月に刊行された。しかし、「第2シリーズ」は『化け蜘蛛』とジェームス夫人訳の『不思議の小槌』(The Wonderful Mallet, 1899)、『壊れた像』(The Broken Images, 1903)の3作のみで構成されており、中途半端な印象を受ける。石澤小枝子²⁴はこれら3作が刊行された年に注目し「出版年がまちまちなのも、セカンド・シリーズとして計画的に刊行しようとしたのではないことを示しているように思う」と述べ、また、次のように考察している。

No.2 との間が一四年も空いているのは何か理由があるのだろうか。ハーンやチェンバレンのもの、或いは「日本昔噺」シリーズの仏語版や独語版、または後に見る単発の物語の出版に追われていたのかもしれない。

セカンド・シリーズと称しているのはこの三冊しか見たことがない。シリーズとしての構成に苦慮した後をそこに見る気がする。

石澤が考察したように様々な要因が考えられるが、なぜ「第2シリーズ」が作られたのか、なぜ3作のみになってしまったのかははっきりとは分かっていない。

「第2シリーズ」のタイトルについてアドバイスした1898年末の書簡から再び八雲と長谷川間のやり取りは途切れており、これ以降ちりめん本に関する具体的なアドバイスや意見は見受けられなくなった。

第2章 『若返りの泉』の成立過程について

2-1 「青春の泉」というモチーフ

第2章では『若返りの泉』の成立過程における謎について考察する。

八雲のちりめん本5冊の刊行年を改めて確認すると、第1作目の『猫を描いた少年』は1898年に刊行され、続く第2作目の『化け蜘蛛』は1899年、第3作目の『団子をなくしたおばあさん』は1902年、第4作目の『ちんちん小袴』は1903年に刊行されている。そして、第5作目の『若返りの泉』は1922年に刊行されている。

ここで注目すべきは、第1作目から第4作目が1898年から1903年の間に数年おきに出版されているが、第5作目の『若返りの泉』だけが1922年というように第4作目から遅れること19年後に刊行されているという点である。

また、『若返りの泉』にはもうひとつ注目すべき点がある。それは、『東の国から』に収録されている「夏の日々の夢」の第5節で語られる物語と内容が重複しているという点である。これらについて染村絢子²⁵は次のように述べている。

ハーンの縮緬本シリーズのうち、第5冊目にあたる『若返りの泉』がハーン没後、前作の『ちんちん小袴』から19年経って出版された。この作品は明治27年7月28日「ジャパン・ウィークリー・メール」で、「夏の日々の夢」のタイトルで発表され、翌年(1895)『東の国から』に収録されている。「若がえりの泉」というタイトルは、縮緬本のためにハーン以外の人々が後年つけたものと思われる。(中略)ハーンの縮緬本はアメリカで非常に人気があった。しかしハーンは1903年(明治36)に4冊目「ちんちん小袴」を出版して約1年後に亡くなってしまった。出版社としてはなんとか5冊セットで販売したいと考え、過去の著作の中から、縮緬本に相応しい物語を探したのではないだろうか。その結果選ばれたのが『東の国から』(Out of the East, 1895)の「夏の日々の夢」(The Dream of a Summer Day)であった。

『若返りの泉』は八雲の没後に第三者が1895年刊行の『東の国から』に収録されている「夏の日々の夢」から物語を抜粋して販売したとし、同著の中で「ハーンの意向は反映されていない」と断言している。しかし、本当に八雲の意向は全く反映されていないと言い切れるのだろうか。八雲のアメリカ時代の著作や書簡から考察していきたい。

八雲は来日以前から『若返りの泉』と類似のテーマを持つ「黄金の泉」(The Fountain of Gold)という短編を1880年10月15日の『アイテム』紙に発表している。また、5年後の1885年の4月末から5月にかけてフロリダを旅したことを機に、「フロリダ幻想」(Floridian Reveries)という一連の作品を書いている。その中の「青春の泉へ」(To the Fountain of Youth)はフロリダ紀行で、「黄金の泉」を詳しく書き直した「熱帯間奏曲」(A Tropical Intermezzo)への導入部となっている。ポンス・デ・レオンの「青春の泉」の伝説やギリシャ神話を織り交ぜつつ繰り広げられる体験談について梅本順子²⁶は次のように記している。

神話や幻想の世界の説明は、不老不死を求める人間の願望がいかに古くから受け継がれてきたものであるかを語っている。人間の古い記憶、祖先から綿々と受け継がれてきた感情、そういうものの存在に注目し、目下現象として表れているものの根底に流れている古い信仰の存在を主張し始めたハーンは、ポンス・デ・レオンの青春の泉との出会いにより、人間普

遍の不老不死への願望に創作意欲を刺激されたことであろう。

不老不死への願望が普遍的なもので、古くから受け継がれてきているということが、フロリダ旅行を通して八雲の中に深く刻み込まれた。この「青春の泉へ」に続く「熱帯間奏曲」は次のようなプロローグから物語が始まる。

これは夏のみじか夜、スペイン領の中南米からやってきた瀕死の流浪者が、いまわのきわに、年老いたスペイン人の僧侶に語った、断片的なおもいでばなしである。老僧は、その男のこぼつきがひどく古風なのに一驚した。それは滅び去った幾世紀かのむかしの、古めかしい趣きのある語りくちであった。……²⁷

「黄金の泉」にはこのような書き出しはない。なぜこの老人が瀕死の状態なのか、なぜ古めかしい言葉遣いなのか、先に提示された謎が物語を読み進めることで明らかになるといった、読者の興味を引く構造になっている。あらすじは梅本の前掲書によると次のようなものである。

「フロリダ幻想」の中の「熱帯間奏曲」は、いわば大人のメルヘンである。スペイン兵は、迷いこんだ泉のある仙境で、そこの乙女と幸せな生活を送る。まさに日本の浦島と竜宮の乙姫を思わせる描写である。ただ刹那の喜びの中にあっても、この世とのつながりを断ち切れない苦悩がついてまわる。遙か彼方から聞こえてくる軍のラッパの音に、兵士は自分の暮らすべき世界を思い起こしてしまうからだ。行ってはいけないという泉の向こう側に、自らの意に反して来てしまった兵士は、泉のそばの影に触れることにより再びこの世に戻る。数百年がたってしまっていることを自覚させられた兵士は、たちまちのうちに老衰に見舞われ、死の床に伏す。こうして、彼岸の世界で仙境の乙女との再会を期しつつ、その一生を安らかに終えるのだった。

引用した箇所では梅本が言及しているように「熱帯間奏曲」は、仙境の乙女と出会い、楽園で夢のような時を過ごす、約束を破り二度と楽園には戻れないという話の筋において浦島の物語によく似ている。加えて、この物語の中で泉は、語り手であるスペイン兵と乙女が出会う重要な場として描かれる。いわば、浦島の物語と若返りの泉の物語を合体させたような物語である。

「熱帯間奏曲」と『若返りの泉』の類似点としては、飲んだり、浴びたりすると若返り、不老不死になる泉が登場するという点が挙げられる。そして、その泉は深い森にあり、澄んでいて冷たいという点も共通している。

1880年に一度発表した「黄金の泉」を再び「熱帯間奏曲」として詳しく書き直すほど、八雲はこの物語を気に入っていたと見え、来日後も「青春の泉」や若返り、不老不死をモチーフにした作品に関心を持ち、類話を収集していたことが1893年6月19日のチェンバレンに宛てた書簡から窺い知ることができる。

Is the tale of the old woman who drank so much of the Fountain of Youth that she drank herself back into babyhood, unwritten? Or is it Japanese? It has savour to me of Western fancy ; but I am not sure.²⁸

次に山下宏一の訳も示しておこう。

「若返りの泉」Fountain of Youthの水を飲みすぎて赤ン坊に戻ってしまったお婆さんの話は、文字には書かれていない口伝の物語でしょうか？あるいはこれは、日本の話でしょうか？どうもわたくしには、西洋の空想の匂いがするのですが、確信が持てないのです。²⁹

八雲が書簡の中で「西洋の空想の匂いがするのですが、確信が持てないのです」と述べているのはおそらく、ポンス・デ・レオンの「青春の泉」の伝説やアメリカ時代に書いた「黄金の泉」や「熱帯間奏曲」が頭の中によぎったからではないだろうか。

またこの書簡から、1893年6月19日の時点で既に「the Fountain of Youth」と表記していることが見て取れる。チェンバレンはこの書簡に対して「日本以外で若返りの水をいっぺんにそんなにガブ飲みした老婆の話は知りません。もっとも、その話を発見するのはかなり難しいかもしれません³⁰」と返信している。

このような書簡をやり取りしたかと思えば、その約1か月後に八雲は長崎を旅している。この長崎旅行というのは「夏の日」を書くきっかけになったもので、さらにその長崎旅行から1か月後の1893年8月16日には「夏の日」を書き上げ、のちに『東の国から』を刊行するホートン・ミフリン社のあるボストンにその原稿を発送している。このような短期間に原稿を書き上げてしまうほど、八雲にとって長崎を旅行した経験は忘れがたいものになったということがわかる。このように旅行で得た体験をもとに作品を書き上げるというのは、フロリダ旅行の後に「フロリダ幻想」を書き上げたパターンと類似している。

それはともかく、来日以前に「黄金の泉」や「熱帯間奏曲」という短篇を書いていること、来日後もそれらと類似のテーマを持つ物語を採集し、「若返りの泉」の物語についてチェンバレンに尋ねていることから八雲が不老不死や若返りといったモチーフを気に入っており、強い関心を抱いていたということが読み取れる。

2-2 出版に向けての明確な展望

次に注目したいのは、1-1でも触れた1894年6月4日付のチェンバレンに宛てた書簡に書かれたリストである。次に再掲する。

(1)“The Story of a Soul,” —to be illustrated with weird, but not ugly, pictures of the Meido,—River of the Three Roads, River of Tears, Sami Kawara, etc.

(2)“(New) Japanese Fairy-Tales”— The Fountain of Youth —The Haunted Temple —The Artist of Cats —The Waiting Stone —The Test of Courage —The Story of an Ihai —The Ise ofuda —The Old Woman and the Oni —Jizo and the wicked Hotel-keeper, etc., etc., etc.

(3)“Western Science and Eastern faith.” A comparison of results in the form of an address.

再掲した書簡中のリストから、1894年6月4日の時点で既に八雲がどのような物語をちりめん本として刊行するか具体的な展望を持っていたということがわかる。リストの(2)に注目すると、「(新)日本お伽話」の筆頭に「若返りの泉」(The Fountain of Youth)がリストアップされている。このことから、八雲には「若返りの泉」をちりめん本にしたいという明確な展望があったと考えられる。

また、ここでリストアップされている物語に注目すると「若返りの泉」以外は見慣れないタイトルばかりである。この点についてSharfは前掲書で“Hearn’s original title *The Artist of Cats* was changed to *The Boy Who Drew Cats*.” というように、ちりめん本が刊行される際に八雲が当初リストに記していた“*The Artist of Cats*”というタイトルは“*The Boy Who Drew Cats*”変更されたと指摘している。この論を踏まえて再度リストアップされているタイトルを検討すると、2番目に挙げられている“*The Haunted Temple*”は直訳すると「化け物が出没する寺」となり、英雄が寺に住み着いた化け蜘蛛を退治する『化け蜘蛛』(The Goblin Spider)の元のタイトルであると考えられる。そして、8番目に挙げられている“*The Old Woman and the Oni*”は、おばあさんと鬼のやり取りが印象的な『団子をなくしたおばあさん』(The Old Woman Who Lost Her Dumpling)の元のタイトルではないかと考えられる。

このように考えると、八雲のちりめん本5冊のうち『ちんちん小袴』を除く4冊がこのリストに挙げられていた物語であり、1894年6月4日の時点で既にちりめん本出版の計画が八雲の中で練り上げられていたと推測できる。

2-3 「夏の日の夢」と『若返りの泉』間の本文異同

染村絢子の論を振り返ると「過去の著作の中から、縮緬本に相応しい物語を探したのではないだろうか。その結果選ばれたのが『東の国から』(Out of the East, 1895)の「夏の日」の夢」(The Dream of a Summer Day)であった」と推測されていた。しかし『若返りの泉』の本文が『東の国から』に収められている「夏の日」の夢からそっくりそのまま抜粋されているというわけではない。両者を比較すると微妙な本文異同がある。それらは物語の内容に関わるようなものではないが、ある共通点を持っていることを発見した。それは、見た目に関する描写が書きなおされているという点である。

詳しく見ると、“So he doffed his great straw hat,”という描写が“So he doffed his huge straw-hat”に変更されている。では、“great”と“huge”はどう異なるのだろうか。ヘルン文庫に収められている“An English-Japanese dictionary of the spoken language³¹”で調べると“great”は“ōkii; ōki na; taishita”とある。一方、“huge”は“meppō ōki na; kyodai (巨大) na”と書かれている。また、同じくヘルン文庫に収められている“Webster’s international dictionary of the English language³²”で調べると“great”は“1. Large in space; of much size; big; immense; enormous; expanded; —opposed to *small* and *little*”とある。一方、“huge”は“Very large; enormous; immense; excessive; —used esp. of material bulk, but often of qualities, extent, etc.”と書かれている。このように両者を比較すると、“great”より“huge”の方が大きさの程度が甚だしいといったニュアンスの違いがあるとわかる。実際に該当の挿絵を見ると、“straw hat”は泉にかがみこんだおじいさんの背中と同じくらい大きさである(資料編の図3参照)。確かに“huge”の方が実物を見たことがない読者にとっては想像しやすいかもしれない。

次に“It was certainly his own face, but not all as he was accustomed to see in it in the old mirror at home.”という描写が“It was certainly his own face, but not all as he was accustomed to see in it in the bronze mirror at home.”に変更されている。ただ単に“the old mirror”と書いてしまうと、ガラス製の鏡を思い浮かべてしまうということを懸念して、物語上の時代を考証し“the bronze mirror”(青銅の鏡)という表現に直したのではないだろうか。

また、「夏の日」には“He put up both hands to his head, which had been quite bald only a moment before. It was covered with thick black hair”と書かれているが、『若返りの泉』では“He put up both hands to his head which had been quite bald only a moment before, when he had wiped it with the little blue towel he always carried with him. But now it was covered with thick black hair.”とされており、「夏の日」にはなかった“when he had wiped it with the little blue towel he always carried with him”(いつも持ち歩いている小さな青いタオルで頭をぬぐうと)という細かな描写が付け加えられている。実際に該当の挿絵を見てみると、黒々とした髪の毛が生え、若返ったおじいさんの足元に「小さな青いタオル」が落ちて

いる（資料編の図4参照）。

これらの本文異同から、八雲は「夏の日の夢」を完成させた後も、ちりめん本にする際に絵で表現しやすい描写になるように、また、読者が想像しやすいように「若返りの泉」の物語を細かく修正していたのではないかと推察できる。

では、このような本文異同はいつ生じたものなのだろうか。『東の国から』の「夏の日の夢」と、初出であると思われる³³1894年7月28日の『ジャパン・ウィークリー・メール』に発表された「夏の日の夢」、それぞれの第5節を比べてみると本文異同がある。そして『ジャパン・ウィークリー・メール』版の「若返りの泉」は、ちりめん本版『若返りの泉』との異同がない。これらのことから「夏の日の夢」がポストンに発送されたと思われる1893年8月から1894年7月28日の間に修正、加筆が行われたと推定できる。また、『東の国から』版と初出を読み比べると見た目に関する描写の書き替え以外にも興味深い異同があることがわかった。それは「日本」に関するものであった。

具体的に、1893年8月にホートン・ミフリン社のあるポストンに発送したという「夏の日の夢」テキストが八雲によって修正されることなく、そのまま『東の国から』に収められたと仮定して、『東の国から』版から『ジャパン・ウィークリー・メール』版への異同を調べると、「若返りの泉」の物語に入る導入部“the recollection of a story: —”が“the recollection of a story once told me by a Japanese student: —”というように加筆されている。また、『東の国から』版の「若返りの泉」の物語には「日本」という単語や日本固有のものを指す語、ローマ字による表記は使用されておらず、西洋の物語として受け取ることもできる。しかし『ジャパン・ウィークリー・メール』版では物語の冒頭で“Long, long ago there lived somewhere among the mountains of Japan a poor woodcutter and his wife.”とあらかじめ「日本の山のどこか」と物語の舞台がどこの国であるのかを明確に示している。それでは、八雲はなぜ日本の物語であるという前提を加筆したのだろうか。そこには長谷川武次郎や「日本お伽話シリーズ」が関係しているのではないかと考える。

論を展開するためにまずは「夏の日の夢」が書かれるまでを整理しておく必要があるだろう。2-1でも述べた通り、八雲は1893年6月19日のチェンバレン宛書簡で「若返りの泉」の類話について尋ね、「あるいはこれは、日本の話でしょうか？ どうもわたくしには、西洋の空想の匂いがするのですが、確信が持てないのです」というように「水を飲みすぎて赤ん坊に戻ってしまったお婆さん」が登場する「若返りの泉」の物語が日本の民話なのか疑っている。この八雲の問いに対してチェンバレンは6月25日付書簡で「日本以外で若返りの水をいっぺんにそんなにガブ飲みした老婆の話は知りません」と答えている。このチェンバレンの返信以降「若返りの泉」の物語は日本のものであると八雲が認めていることは、「(新)日本お伽話シリーズ」のリストの筆頭に「若返りの泉」を加えていることからわかる。

その後 1894 年 7 月 16 日に長谷川と初めて顔を合わせてから、『ジャパン・ウィークリー・メール』に「夏の日々の夢」が発表される 7 月 28 日までの間に、「若返りの泉」の物語は日本の物語なのかという長谷川からの追究を受けたのではないだろうか。日本の昔話ではないとすれば「日本お伽話シリーズ」の趣旨とは異なるので「若返りの泉」は必然的に省かれることになるだろう。このような事態を危惧した八雲は日本の物語であると明示するために前述のような加筆を行ったと考えることもできる。

しかし、実際には「若返りの泉」は八雲の生前に出版されることはなかった。次に、1-2-2 でも触れた 1894 年 10 月下旬頃の長谷川宛書簡を再掲する。

あなたに無償で提供した物語は日本の起源ではないと言われました。これは申し訳ありません。しかし、“The Old Man and the Goblins” も日本の起源ではありません。日本の民話に取り入れられた西洋の物語もあります。若返りの泉の物語は、どのヨーロッパの言語でもその物語を読んだことがないという学生に教えられました。彼が美濃かどこかでこの話を見つけたのではないかと私は思います。

この書簡から、二人の間にどのような話が交わされたのか推測できる。書簡の中に「若返りの泉」の名前が出ていることから、八雲が「若返りの泉」の物語をこの書簡が交わされる前に、既に長谷川に提供していたと推察できる。第 1 章で述べた通りこの 1894 年 10 月下旬ごろに交わされたと思われる書簡以降、4 年後の 1898 年まで書簡でのやり取りは途切れている。長谷川は、「若返りの泉」の物語が日本のものであるという確信が持てず、出版を躊躇し保留にしていたのではないだろうか。そのため、この 4 年の間に「若返りの泉」の出版計画がうやむやになってしまったのではないかと推測される。

では、なぜ『若返りの泉』は 1922 年になって出版されることになったのだろうか。アン・ヘリング³⁴⁾によると、

弘文社の、欧文出版開始より数えて、三十七年間の月日がすぎたところで、小泉八雲最後の遺稿が、絵入り本として発表されることとなった。著者の没後（明治三十七年）十八年目にあたる。長谷川本の出版史には、謎が多いが、八雲の遺産であり、弘文社の貴重な「財産」といえる作品が出るのに、なぜ二十年近くもかかったのかは、最大の謎である。遺族の希望か、追悼の記念出版に発行したのか、原因はいろいろ考えられる

というように、「遺族の希望か、追悼の記念出版に発行したのか、原因はいろいろ考えられる」が謎はまだ多いと述べている。この論を踏まえると、「遺族の希望」や「追悼の記念出版

など、出版が 1922 年になった原因はいろいろ考えられるが、八雲には日本の物語として長谷川弘文社の「日本お伽話シリーズ」から『若返りの泉』を刊行したいという明確な意向があった。にもかかわらず、長谷川の側で日本の物語であるという確信が得られなかったためか、出版の計画が 1894 年から 1898 年の間に立ち消えになってしまった。その結果『若返りの泉』は、生前最後のちりめん本から 19 年を経てようやく出版にこぎつけたのではないかと考えられる。

おわりに

これまでに論じてきた事をまとめると、①八雲が、「若返りの泉」の物語が内包する不老不死や若返りというテーマに強い関心を抱いていたこと、②「(新) 日本お伽噺」に向けてのリストで「若返りの泉」が筆頭に書かれていたこと、③『東の国から』の「夏の日の夢」と比較すると『若返りの泉』の本文には見た目に関する描写の細かい異同があること、以上の 3 点から、『若返りの泉』は、八雲の没後に第三者によって『東の国から』の「夏の日の夢」から抜粋されて生まれたものではなく、八雲は生前から『若返りの泉』を出版したいと考えていて、ちりめん本に合うように細かい描写を書きなおしていたと考えられる。

これまで『若返りの泉』が 1922 年に出版されたことや、「夏の日の夢」と内容が重複していることについて少し触れている先行研究は存在していたが、その先の成立過程まで考察する論は管見の限りでは染村論だけであった。本稿では、八雲は生前に『若返りの泉』を出版したいという明確な展望を持ち、細かな修正をしていた可能性が高いということを指摘したという点において、八雲のちりめん本研究を一步進めることができたといえるのではないだろうか。

一方で、『若返りの泉』の典拠について、また他の 4 冊のちりめん本についてなど積み残した問題点や疑問点もある。今まで手薄になっていた八雲のちりめん本研究であるが、まだまだ調査、考察の余地があるといえるだろう。

¹ Lafcadio Hearn, *Out of the East*, Boston and New York: Houghton, Mifflin & Co., 1895.

² 大塚奈奈絵「テラコヤ（寺子屋）―「日本」を発信した長谷川武次郎の出版」『国立国会図書館月報』2011 年 7 月

³ アン・ヘリング「縮緬本雑考（上）」『日本古書通信』1982 年 5 月

⁴ Frederic A. Sharf, *Takejiro Hasegawa: Meiji Japans preeminent publisher of wood-block-illustrated crepe-paper books*, Peabody Essex Museum, 1994

⁵ Elizabeth Bisland, *The Japanese letters of Lafcadio Hearn*, Houghton Mifflin Co, 1910

⁶ Elizabeth Bisland, *The Japanese letters of Lafcadio Hearn*, Houghton Mifflin Co, 1910

⁷ Elizabeth Bisland, *The Japanese letters of Lafcadio Hearn*, Houghton Mifflin Co, 1910

⁸ Kazuo Koizumi, *More Letters from B.H. Chamberlain to Lafcadio Hearn*, The Hokuseido Press, 1937

⁹ 斎藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第十五巻』恒文社、1988 年 9 月

¹⁰ 石澤小枝子『ちりめん本のすべて―明治の欧文挿絵本―』三弥井書店、2005 年 4 月

¹¹ 長谷川武次郎「木版畫の輸出」『美術新報』（畫報社）1914 年 1 月（大塚奈奈絵「テラコヤ

-
- (寺子屋) — 「日本」を発信した長谷川武次郎の出版『国立国会図書館月報』2011年7月より引用)
- 12 アン・ヘリング「縮緬本雑考(上)」『日本古書通信』1982年5月
- 13 Frederic A. Sharf, Takejiro Hasegawa: Meiji Japans preeminent publisher of wood-block-illustrated crepe-paper books, Peabody Essex Museum, 1994
- 14 Elizabeth Bisland, The Japanese letters of Lafcadio Hearn, Houghton Mifflin Co, 1910
- 15 Frederic A. Sharf, Takejiro Hasegawa: Meiji Japans preeminent publisher of wood-block-illustrated crepe-paper books, Peabody Essex Museum, 1994
- 16 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 17 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 18 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 19 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 20 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 21 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 22 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 23 Sanki Ichikawa, Some New Letters and Writings, Kenkyusha, 1950
- 24 石澤小枝子『ちりめん本のすべて—明治の欧文挿絵本—』三弥井書店、2005年4月
- 25 染村絢子『ラフカディオ・ハーンと六人の日本人』能登印刷出版部、2017年1月
- 26 梅本順子『浦島コンプレックス—ラフカディオ・ハーンの交友と文学—』南雲堂、2000年1月
- 27 平井呈一訳『小泉八雲作品集 第一巻』恒文社、1965年11月
- 28 Elizabeth Bisland, The Japanese letters of Lafcadio Hearn, Houghton Mifflin Co, 1910
- 29 斎藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第十五巻』恒文社、1988年9月
- 30 斎藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第十五巻』恒文社、1988年9月
- 31 Ernest Mason Satow, An English-Japanese dictionary of the spoken language 3rd edition, Kelly&Walsh, 1904
- 32 Noah Porter, Webster's international dictionary of the English language, Merriam, 1898
- 33 『ラフカディオ・ハーン著作集 第十五巻』(恒文社、1988年9月)の年譜では1893年8月28日の『ジャパン・ウィークリー・メール』が初出となっている。しかし、1893年8月26日付の『ジャパン・ウィークリー・メール』は存在したが、8月28日付のものは見つけれなかった。したがってこの記述は誤りであると思われる。ちなみに1893年8月26日の『ジャパン・ウィークリー・メール』には「夏の日々の夢」は掲載されていない。
- 34 放送大学付属図書館編『ちりめん本—長谷川武次郎とちりめん本の歴史—』放送大学付属図書館、2001年3月